

た。

Monitrol 血清を用いた血清蛋白濃度の蛋白結合の影響の検討では、蛋白濃度が 2g/dl 以下と低下すると蛋白結合率は低下した。

クレアチニン、クレアチンは、100mg/dl 以上の高濃度では、蛋白結合率の低下がみられた。

セルローズ、アセテート膜を用いた電気泳動法によるバイオオートグラフィにより、CEZ は血清蛋白中のアルブミンと結合することが窺われた。

セファデックスのゲル濾過法により、慢性透析患者血清と正常者血清の蛋白結合は、ゲル濾過で解離する弱い結合であった。

5) 第3世代セフェム剤の体内動態について

山作房之輔・鈴木 康稔(水原郷病院内科)

第3世代セフェム剤7剤を同一の健康成人被検者5名にそれぞれ1gを持続注入器で定速度で1時間で注入した際の血清中濃度と尿中濃度を測定し、体内動態を比較した。

注入終了時の平均最高血清中濃度は CMNX 109.3, LMOX 98.7, CBPZ 84.8, CAZ 61.2, CZX 59.9, CMX 53.7, CTX 46.6 μg/ml で、CTX を除く6剤の8時間後の濃度は CMNX の 5.4, LMOX の 4.7 μg/ml が高く、CMX は 0.1, 他の3剤は 1 μg/ml 台で、CTX は6時間後に 1.0 μg/ml であった。8時間後までの尿中回収率は CMNX の89%を筆頭に CZX 79, CBPZ 78, CAZ 77, LMOX 75%, CMX 62%, CTX 55%であった。T<sub>1/2</sub>(β)は LMO × 1.9, CMNX 1.8, CZX 1.6, CAZ 1.5, CBPZ 1.4, CTX 1.3, CMX 0.8時間、AUC は CMNX 294, LMOX 231, CBPZ 171, CAZ 119, CZX 104, CMX 71.8, CTX 61.7 μg·h/ml で、血清中濃度を中心とした体内動態は CMNX が最も優れ、次いで LMOX であった。

6) 抗生物質の髄液移行の検討

—FOM, ABPC, DKB, CMD, CAZ, CXM について—

倉田 和夫(長岡中央総合病院) 整形外科

抗生物質の髄液内移行についての報告は少ない。私達は腰痛などの症例に水溶性造影剤により脊髄造影ミエログラフィを施行する際に、採取した髄液の一部を検体として髄液移行濃度の経時的推移を検討した。

この結果今回検討した各抗生物質の移行濃度は

FOM > CAZ > CXM > ABPC > CMD = DKB の順で、FOM 以外は極めて低い傾向を示した。FOM は分子量は小さく、蛋白結合度も低く、半減期も長い抗生物質であるが、他剤に比して良好な髄液内移行濃度を認めた。

これらの一連の検討から髄液移行濃度の表示には、抗生物質投与2時間後の血清/髄液比(C/S値)と、実測濃度値を併記することが、臨床上薬剤の選択に有用と考えた。

更に FOM 4.0 g. を手術開始2時間前に投与することにより、予防投与の立場から、術後感染予防に有効な薬効を期待できるものと判断した。

7) 抗生物質の滲出性中耳炎貯留液中への移行に関する研究

—滲出性中耳炎における細菌の関与—

富山 道夫・田中 久夫(新潟大学医学部) 耳鼻咽喉科学教室  
今井 昭雄

滲出性中耳炎(以下 OME)は従来無菌性中耳炎として扱われてきたが、近年小児の OME については細菌学的、免疫学的、生化学的 approach がなされインフルエンザ菌、肺炎球菌を始めとする細菌の関与が立証されてきた。そして OME を独立した疾患と考えず急性中耳炎からの連続性変化としてとらえること、OME の成因に上咽頭細菌叢の関与があることなどが報告されている。そこでわれわれは OME に対する抗生物質療法に着目し、その第一段階として OME の中耳貯留液中への移行を測定した。また OME 罹患児と OME 非罹患児の上咽頭細菌叢の比較を行い若干の文献的考察を加えた。

8) Ceftizoxime (CZX) の頸部リンパ節への移行に関する検討

田中 久夫・鈴木 正治(新潟大学耳鼻科)  
富山 道夫・今井 昭雄

富樫 孝一(新潟県立がんセンター新潟病院耳鼻科)

新潟県立がんセンター新潟病院耳鼻咽喉科において1986年4月より1987年3月までの12カ月間に、頸部郭清術を行った症例のうち22例でセフェム系抗生物質 Ceftizoxime (CZX) の頸部リンパ節への移行に関する検討を行った。2g one shot 静注にて平均30分後81.7 μg/g, 60分22.5 μg/g, 120分17.0 μg/g とリンパ節内濃度を示した。また、リンパ節移行率も高く30分、60分、120分とも40%前後であった。耳鼻咽喉科領域の感染症に対し P. aeruginosa 以外の起炎菌に対しそ